昭和十二年十二月

會報 V

京都帝國大學文學部
地理學談話會

目次

一、談話會報告……一
二、教室通信……四
三、會員消息……六
四、會員論著目錄……七
五、談話會々計報告……一〇

一、談話會報告

○昭和十二年六月十九日　午後三時

一、北攝山村の若干考察　三回生　中森增三

一、足利時代に於る遣明使の記錄　藤田元春

（出席者）小牧助教授、藤田講師、吉田敬市、田中博、瀧本貞一、近藤忠、山口、朝永、野間、木村、和田、杉村他學生十三名

○昭和十二年九月二日（土）午後二時

一、出雲の製鐵業　三回生　並河則由

一、等時刻線圖に就て　今村新太郎

（出席者）小牧助教授、藤田講師、田中秀作、米倉二郎、吉田敬市、織田武雄、近藤、山口、朝永、今村、長谷部野間、和田、他學生十一名

○第五回地理學談話大會

昭和十二年十一月二十三日午前九時より　於樂友會館

一、開會の辭　藤田講師

一、廣島附近の石器時代に對する先史地理學的疑問　神尾明正

廣島附近の貝塚は漂移したらしいが比治山、中山貝塚は動いてゐない。之は殼の弱い附近の貝が含まれてゐること、砂粒の角も丸さが少いからかく考へるを得る。又サルボ貝が出るのは他の貝塚の赤貝と異る所。又この二貝塚からはナガガキが出るので當時は幾分か温かかつたのではないかとも考へられる。この二貝塚が十米位しか海面より距つてゐないのに動いてゐないのは、之がエロージョン・ベイス以下にあつたことを語る。海進を見後に太田川を急にする如き隆起があり、大洪水起り他の貝塚は流れて再堆積したのであると考へるのが最もよいと思ふ。

一、大都市附近の交通に就て　今村新太郎

最近人口現象の注目すべきは都市集注である。都市は都心を中心として同心圓的に擴大する。その第一段階は都心が密になり第二は逆に粗となりこゝに交通機關の發達をみる。この人口と交通機關との關係については　　の關式がある。之が實例を東京にとると、一九二〇年と一九三五年を較ると、人口は三三五万より五八七萬になる。バス、市電は共に一四六キロ時であるから、東京驛から周邊までは三十—四十分を要する。それで之は都心に交通量が多い。神保町—神田、東京驛附近が殊にそうである。丸ノ内の晝間人口は一六萬夜間人口は五萬で之を裏書する、神田には學生が四萬五千程居るので交通量も多い。要するに市電はより早い省線に客を吸收されること明である。地下鐵は八萬位であるから今はまだ勢力をもたぬ。目下交通統制は考へられてゐるが各會社は自己の利益に汲々とせず一丸となつて交通の圓滑を期すべ

きである

一、地理學に於ける環境の意義　　松井武敏

之は極めて大きな問題であるから、今述べつくすことは出來ない。今日思想界では西田博士以下この問題は盛に論議される樣になつた。地理學としてはかゝる關係の多い環境を深く研究し、幾層の跡を見るべきであらう。ラッツェルも見直すべきである。必ずしも地理學を地誌とか、空間科學とかに限る必要はない。環境を無視することによつて我々は地理學の生存權を殺してゐるのではないか、人間存在の構造を明にして景觀が明になるのではないか、環境を充分に考へてこそ現實性、因果性、科學性のある地誌が生れるのである。環境はまづ外なるものと考へられるが、又内的なる種といふものや、又論理的環境――思想は思想を生む故――をも考へられる。結局環境は世界ともいへる。

一、江南の地形と聚落　　米倉二郎

江南三角洲とは江陰――杭州以東の正三角形（一邊二百粁）の地域で、この中には舟山列島と同じ原因の山脈による丘陵が點在する。このデルタは五十―六十年に一哩づゝ沖積されてゐるので、この附近の地域は歷史時代の生成である。この揚子江の作用の他に注目すべきは、杭州灣の高潮で（二十呎）で、之が揚子江の土砂を再び海岸に堆積するのである。禹貢によると揚子江は三江をなしたらしい、このデルタの土は粒が小さく柔軟で、土地が低平なので潮は遠く溯り、この上限が顯なる地名を有する。又この間にはクリークが多く三八〇呎毎に一本あるといふ。この平野は肥沃で昔の住民は太湖附近にゐたが、その爲に怠惰であつた。宋代に入り耕作が奬勵され排水が必要となつてクリークが作られた。之が計畫的に行はれたのは皆―南北朝時代の事である。太湖附近は低濕でこゝにも輪中に似た聚落がある。村落が水路を繞らしてゐるのは北支の土籬と共に地形の然らしめる所である。市鎭も赤水路を繞らしてゐる。

一、奈良盆地の民屋　　島三夫

――大和棟は大陸文化の遺物也――

民家は自然的條件と人文的影響に支配されてゐる。前者の例としては大阪邊の段纖造、輪中の水屋、找上家屋等であらう。大和盆地には大和棟と稱して中央に草葺で傾斜急な主屋があり兩側に低く瓦葺の傾斜緩な小さな棟が並ぶものがある。かくの如き形式は用材よりのみしては解釋が下せない。臺灣旅行の際臺灣家屋との類似より大和棟は、支那より朝鮮を經て傳つたのではないかとの暗示を得た。朝鮮の馬蹄形家屋も北九州の鍵作りも大陸傳來のものと思へる。

一、冷水峠の交通地理　　瀧本貞一

新道の高度二九〇米、舊道三一二米。戰國時代迄は下關―門司より海岸に沿つて博多、大宰府に行つたが參覲交代の時代に入ると、この冷水峠が用ひられる樣になつた。慶長五年に黑田長政が筑前に封ぜられてからかくしたのである。之が冷水道である。之

が用ひられた原因は小倉に近いこと。峠の上に平地があり宿場があつて便利なこと。第三に政治地理的にみても都合がよいこと、第四に外國貿易による長崎の發展と共にこの最短の通路が愈々有利になつたことである。今日はこの峠は鉄道時代以前の舊態に戻つてゐる。今日筑豐線がこの冷水通を通るが、地方的な意義しかなく、博多ある限りこの線は鹿兒島本線に比して十三粁短くてもやはり九州の本線とならぬと思はれる。

一、近江八幡町の古水道とその地理學的意義

吉田敬市

近江八幡町は滋賀縣第四、人口一萬餘の都市である。こゝにある、現在も用ひられてゐる原始的な水道は三五〇年前豐臣秀次が築城したときに初まると考へられる。水道を有する町は徳川時代に二九あつたが、江戸はその範であつた。然るに八幡のは之を模倣してゐない。その構造は先づ水源地についていふと、郊外の高所に二間四方位の穴を掘り、之に桶を埋め湧水を貯へ之を竹樋（八寸×二間）を以て町に導くのである。町には又小型の水源地の如き構造の桶を埋める、水はその中へ來て時には地表に迸滿ちてゐることもある、今日七百位の井戸があるが、その買賣は昔は五十兩で新しく掘ることは禁じられてゐたし、今日でもそれは可成許さぬ方針である。この經費は自治的で月に十錢―一圓位の水道料でまかなつてゐる。これは土地が粘土金氣がある爲に飲料水が得られぬ爲で町の東半即ち砂利層で湧水の得られる所は掘拔井戸を用ひてゐる。

一、黄　河

藤田元春

禹貢には九河の記錄があり、碣石に至るとある。がデルタの遊行は餘り大でない様だ。それは附近が沈降しつゝある爲らしく又黄土が風に運び去られる爲だと考へられる。瀦堤以東$3^\circ \times 1^\circ$の地域は一八八五年の河道變遷以後出來た土地である。この地域は馬賊のようなものが所有してゐる。この北支平原は洪水で常に苦しめられてゐるが、今以て洪水の對策はなく堤防は水路より寧ろ離れて水を溜ねる爲に用ひられてゐる。吾人の任務はこの治水策を攻究して以て王道樂土を作るにある。

一、盆地性より見たる近江の聚落

田中秀作

近江盆地は之を自然的に見れば周邊の山地が高峻でなく斷層其他構造線による陜谿や鞍部が多く中央より西に偏して大湖が存し其形狀が又構造線に支配せられて北部は北々西より南々東、南部は北東より南西に延びてゐる。次に人文的には盆地の位置が本州の中央地の峡部に在る關係上兩方の海と山城盆地濃美平野に近く殊に京都に接近してゐる。之により聚落の密度は山地から低地に向つて漸次增大するも、湖東地方では湖岸に接する部分は稍稀薄で百米乃至二百米の間に密集する、聚落の排列は湖岸線と之と直角な山地の無數の峠から、湖岸に向ふ多くの線とに支配せられ、之が村落都市の形態をも制約する。京都に近く權門勢家や山門、日吉神社の私領莊園、市場、城等が史上に交錯發達し、それ等が比較的よく保存せられて現在の主要聚落に變化してゐることも亦

盆地聚落の特性と見るべきであらう。

一、漫　談　　　小川琢治

關ヶ原戰、峯直戰などから戰爭の成敗は軍事地理的觀察から豫想出來ぬことを述べ次で戰爭から見た地理學といふ新題目を設定せられクリークに及ばる。

（文責在記者）

（尙當日演題を揭げられた山口、織田二氏は所用及病臥中の爲不參された。講演概要は二回生淺井君を煩はしたが爾後講演者には草稿呈出を願ふことにする。）

同日講演會終了後樂友會館東庭にて記念撮影を行ひ、午後一時より同會館食堂にて午餐會を行ふ。小川博士、寺田貞治、內田寬一氏を始め數氏のテーブル・スピーチあり、秋山氏は瀨戶內直島について卓上講演を試みられ、その後現下地理學及地理學界への要望又はその任務について各氏より議論百出盛に意見交換せられたが、遂に三時過に至つて止むなく閉會となつた。

講演會出席者氏名左の如し（○印は午餐會出席者）

○吉田　敬市　○松下　淸雄　泉　芳勝　關野　忠雄
○寺田　貞次　○谷淵　梅雄　○藤田　元春　○田中　秀作
○菊田　太郎　○小牧　實繁　○今村新太郎　○渡邊　久雄
○兼子　俊一　○神尾　明正　喜多村俊夫　野村　英一
○松井　武敏　○中江　健　堀井甚一郎　金井　千似
並河　由則　辻田右左男　伊藤　博　○秋山　植士
位野木壽一　○島　之夫　○中村良之助　○廣瀨　淨慧
寺田　眞一　○藤本　貞一　下村　數馬　中森　晋三
鹿內　芳衞　○田中　博　佐伯　英二　安齋　孝助
○小川　琢治　丹羽　正義　外山　軍治　○近藤　忠
○野間　三郎　淺井　辰郎　內藤　文四　林　宏
柴田　孝夫　○朝永陽二郎　○和田　俊二　○內田　寬一
○米倉　二郎　（以上到着順）

二、教室通信

○三回生卒業論文題目

一、天草諸島の人口―人口の地理學的意義に就ての一考察　　伊藤　博
一、北攝に於る經濟地理學的考察　　中森　晋三
一、出雲の水產業の地理學的考察　　並河　由則
一、三島諸島の人口地理學的考察　　佐伯　英二
一、臺北市の都市地理學的考察　　西村　睦男
一、臺灣北部の茶に就いて　　下村　數馬

○小野鐵二講師　特殊講義、地圖學

二學期より開講。廣島より來講さる。

○小野三正講師

例年の如く地圖・製圖實習を本年も實施され十一月　日より十二月十日まで約四十時間係指導を忝うした。

○藤田元春講師

二學期より日本地理學の諸問題と題して特殊講義を授けられることになる。

○室賀講師

二學期よりフランス地理學書講讀を開講さる。

○春季旅行

一行は小牧助教授、野間助手、木村副手、學生四人

六月二日九時京都發、姫路を經て津山に下車、城趾より展望一時間、夕刻勝山着。バスで湯原に向ひ水島館泊。旭川底の野天風呂趣深し、翌三日は徒歩で四里餘、初夏の暑さを冒して二時、蒜山盆地の上長田着、昭和化學工業の珪藻土工場四ッ塚を見學し、龍泉閣泊。翌四日は各自盆地の調査。岩石、土壌、地下水、氣候沿革、産業、口碑、習慣等拙い乍らも集まる。同夜は感良き津田屋(中蒜田)泊。翌五日は曇天、盆地西部を調べ乍ら大山に向ふ。終日徒歩、夕刻大山寺の觀徳院に宿を乞ふ。翌六日は遂に雨天、バスで米子に下り解散。各自、出雲大社、日御碕、境等へ。この春の旅行は短く、且後半雨に會つたが蒜山盆地の小調査を果し得たのは幸であつた。(淺井記)

◎地理學教室秋季旅行概要

二回生の秋季旅行は白川郷その他の案もあつたが、結局中部地方巡検と定り、一週間餘の準備の後十月十二日朝京都驛發、一時四十分豊橋で三信鐵道に乘かへ豪雨中の天龍川の谷を上る。一行は小牧助教授、野間助手、學生四人。車中始めて見る景觀に話がはづむ。五時過ぎ二百餘のトンネルを經て天龍峽驛着。先生のみ先に飯田に向はれ、五人は夕闇の龍角峰に龍穴を探すも遂に見當らず。七時飯田着。衣川先輩に迎へられ雨上りの美しい町並を見つゝ大和館と云ふに泊る。十一時迄時局談と衣川氏の飯田高女赴任談に時の經つを忘れる。翌十三日は深い霧に晴天を喜び、霧間に覗く伊那山地の風光に一同感嘆する。突然八木貞助先生の來訪あり、恐縮し再訪を約す。八時半高女に伺へば先生は縣の地圖を前に斷層、岩石、氣候、交通、風俗、城址等につき永年の御研究の一端を語られ、果ては滿洲御旅行談。象化石に迄及んで快談盡きる時を知らなかつた。高女を辭して櫻町の上のテレスに登り、市街、天龍川を展望し、下つて元結の製作を見、城址に向ふ。カギ形の道路の奥に、高い突出したテレスを占める城址は正に要害の感が深い。櫻町驛で衣川先輩に案内の勞を深謝し、別を告げて十二時吾々は出征兵士と共に辰野に向ふ。秋空の下を二時辰野着。沈潜の色見える岡谷を經て、上諏訪下車、驛の鍋に荷物を預け諏訪中學の矢澤大二學士の御案内で高島城址、カリン畑、六斗川を廻り、諏訪盆地の地誌、殊にカリンにつき清新な御研究を伺ふ。既に日落ち霧ヶ峰へ難いので矢澤學士に同道を願つて斷念し、豐富な溫泉と湖産の公魚、鯉に諏訪を心行くまで味はふ。昨日の豫言適中し、この宿の主人も出征の由、一行中の可能性有る者氣が氣でない。翌十四日は小雨間もなく晴れ、ハイヤーで參拜者圓を接する諏訪上社に詣り、歸途天然ガスを小川の某家で見せてもら

ふ。九十間の地底より出、一井能く百軒を賄ふと。十時乗車、壮快な高原上の小淵澤驛で乗かへ半ば紅葉せる原始林中を縫ふ。清里驛で下車、三軒の美ヶ森に上る。西に赤石、南に富士、東に關東山脈裏側を望み、眼下は一面に紅葉せる八ヶ岳裾野その中に白く上るは汽車の煙か。驟雨沛然、後の虹の美しさ、又忘れ得ぬものがある。先生の痩姿も亀澀し。驛前に各自そばの幾椀を重ね、再び乗車、小諸に向ふ。藤村に名高き秋の千曲川は一層美しく。ファンクに捉へられた瞬間は云ひ知れぬ魅力を感ぜしめる。暮色迫る小諸は城址、懐古園の見學に留め、六時の汽車で上田南の別所に向ひ相屋別荘に入る。先生の値段交渉、例によつて鮮を極める。長野師範の藤内氏既に來られてゐる。清澄な温泉は快く、新潟よりの魚は佳である。翌十五日は直ちに長野に向ふ。この附近も出征見送り盛である。今日は全天雲に包まれ、携帶寒暖計は十時でも十六度しかない。バスで善光寺に詣り、林檎賣りの聲を左右に聞きつゝ城山より善光寺平展望。藤内氏より二段のステップフールト、裾花川のゴルヂ、東側の扇状地等を説明して戴く。晝食を了へて物産陳列館を見、長野師範に郷土研究を參観する、五萬の長野縣大模型は數多き優秀陳列品の中でも殊に印象的である。二時半藤内氏に分れ、乗車して北行し、柏原に下車。野尻湖、一茶史蹟の土蔵と墓を見て廻る。野尻湖は夏の殷盛に較べれば落ち時に鐵鉄の音をきくのみ、寒さ亦北國近きを思はせる。突然奴高が夕空に雲の間より現はれ一同を喜ばせる。一驛を乗車、田口よりハイヤーで赤倉温泉香岳樓へ。途中事有つて宿へついたのは八時半、引揚にしては豊富な湯である。幸があつたので俄然日方が開闊となる。氣溫益々下る。翌十六日は雨靄漸々、見えるべき妙高黒姫の雄姿も日本海も一面の白幕に蔽うれてゐる。驛に到り解散し、三隊に分れて京都に向ふ。今回の旅行は大體中部地方横斷であり、各地で先輩、同學の士の御指導を得たので吾々は大なる示唆を與へられたのであつた。（二回生淺井記）

三、會員消息

○小牧助教授兼て學位論文を提出中なりしが、去る六月三十日教授會の通過決定を見、八月七日文部省辭令を以て文學博士を授けられた。

○木村應治君　去る八月三十一日充員召集に應じ目下第一線にて勇躍轉戰されつゝあり、同君への通信、慰問品は出征中島本部隊〃園部隊氣付部隊宛出されたし。

○村井敏衛君　十月二十九日充員召集に應じ富山歩兵第三十五聯隊第八中隊に入隊され、目下同隊に猛烈なる訓練を受けられつゝあり。

○中江　健君　十月三日郷里津山にて野村妙氏と結婚され、新居を阪和沿線桑津町に構へられた。

○杉村正二郎君　九月二十八日天理中學校に職を奉ぜらる。

○內田秀雄君　東京鐵道中學教諭、和洋女子學院講師に就任さる。

○野澤　浩君　松山高等學校講師就任さる。

○藤田圭雄君　宮內事務官(實錄宮附)を拜命。

楊文壽・李彰・梁希杰　中華民國の三學生は夏期休暇前後に夫々歸國さる。

○會員住所變更

勝田圭通 [redacted]
內田勲 [redacted]
太田久喜雄 [redacted]
島之夫 [redacted]
增田忠雄 [redacted]
三友國五郎 [redacted]
渡邊茂藏 [redacted]
大橋英男 [redacted]
舩子俊一 [redacted]
谷淵梅龜 [redacted]
土田英夫 [redacted]
須藤賢 [redacted]
長谷部健夫 [redacted]
衣川芳太郎 [redacted]
杉村正治郎 [redacted]
中江健 [redacted]
中森增三 [redacted]
淺井辰郎 [redacted]

四、會員論著目錄

○論著目錄に就いて（昭和十二年）

談話會報の內容に就ては前號にて會員諸氏の御意見を求めた處でありますが、田中秀作氏の御示教に從つて、本會報より漸次會員論著目錄を記載することにしました。

此目錄では昭和十二年一月以降十二月中旬迄を茲に採錄しましたが、此等は地理學・地理教育、地球等の雜誌に登載されたもののみを摘錄した爲に極めて不充分なるものであります。從つて此目錄を多少でも整つたものにする爲には會員各位が論文御發表の都度、又は昭和十三年七月末迄（次號編輯締切豫定）に論題・登載誌名・刊年月を一纏めに御一報下さるか或は別刷を御送附被下様願はねばなりません。

著書

石橋五郎・別技篤彦共著　地理教育論　五月廿五日　成美堂
楠田鎭雄著　北米合衆國新地誌　九月二十六日　古今書院
小牧實繁著　先史地理學　十月十六日　內外出版社
小川琢治監修・太田喜久雄編纂　東亞大陸諸國疆域圖　十二月二十日　富山房
島之夫著　日本民族地理（近刊）　古今書院

地理學教室　地理論叢第九輯　昭和十二年十二月中出來の豫定

一、淺井得一　本邦都市の人口地理學的考察
一、内田　勛　臺灣に於ける輪中類似の地域について
一、小葉田亮　本州に於ける蝦夷地名「ナイ」の分布
一、木村憲治　滋賀縣の農業地理學的研究
一、庄司久孝　臺灣人口の地理學的考察 ——人口圖による考察——
一、中江　健　高知平野の地理學的研究 ——主に人口を中心として——
一、和田俊二　生駒山脈西斜面に於ける水車の地理學的研究
一、古地圖目錄　その三

論　文

（一　月）

地　球　脊　鯤　鯖　内田　勛
地理學　愛媛縣郡中町の地理的考察　岡田良衛・野澤浩
同　英蘭雜記　小牧實繁
地理教育　文明の發展と地理（一）　内田寛一
同　美濃揖斐谷の季節的移動聚落（一）　秋山稔士・田中秀作
同　高知平野の聚落に就いての二三の考察（三）　村松繁樹
同　一地理學者の生涯（二十四）　小川琢治
同　山峽「五家莊」を觀る　伏見義夫
史　林　福州の琉球館　米倉二郎

（二　月）

地理教育　地理における自然性と人文性（一五）　内田寛一
同　高知平野の聚落に就いての二三の考察（四）　村松繁樹
同　一地理學者の生涯（二十五）　小川琢治
同　山峽「五家莊」を觀る（二）　伏見義夫
地理學　愛媛縣郡中町の地理學的考察（承前）　岡田良衛・野澤浩
同　英蘭雜記（承前）　小牧實繁
同　高山市について　大橋英男

（三　月）

地理教育　丹後國箱石濱砂丘地域の研究（一）　小牧實繁
同　美濃揖斐谷の季節的移動聚落（二）　秋山稔士・田中秀作
同　一地理學者の生涯（二十六）　小川琢治
史前學雜誌　再堆積した石器時代貝塚の一例 ——廣島市古田町大歳神社貝塚——　靜尾明正

（四　月）

地理教育　高等學校高等科地理學教授要旨の改正に就て　小川琢治
同　首都としての南京（一）　米倉二郎
同　丹後國箱石濱砂丘地域の研究（二）　小牧實繁
同　美濃揖斐谷の季節的移動聚落（三）　秋山稔士・田中秀作
地理學　家屋の構造に及ぼす霧の影響　島　之夫

同　先史時代の聚落　三友國五郎
同　佛蘭西雜記(一)　小牧實繁
地球　高月拇斐線山村の觀察　小牧實繁・木村澈治
同　(紹)B. Dietrich: Vom Wesen des Amerikaners. Wirtschaftsgeographie 10. Heft. 1936　安藤鏡一
同　(紹)J. Goldberg: Die Standorte der polnischen Textilindustrie und ihre Lokalisationsprobleme. Wirtschaftsgeographie 3. Heft. 1934.　安藤鏡一

(五月)

地理學　佛蘭西雜記(二)　小牧實繁

(六月)

地理教育　穩なき森の新都市豐中市の出現　島之夫・石井信一
地理學評論　(講演要旨)滿蒙聚落の植民地理的意義　田中秀作
同　(同)先史聚落に就いて　三友國五郎
同　(同)松前廣長の「蝦夷島奇觀補注」について　村松繁樹
同　(同)中世アラビアの旅行者と商人に就いて　藪內芳彥
同　(同)京都市近郊の條里と地割　吉田敬市
同　(同)歷史時代に入つて起つた最後の大きな地理變化の野外資料とその先史地理學的意義　神尾明正
同　(同)大阪市の特殊景觀——特に問屋に就いて——　島之夫
地球　一五八六年木版日本古地圖解說　藤田元春
同　北海道の民家　島之夫
彥根高商論叢　滿蒙聚落の植民地理的意義　田中秀作
信濃教育　地理學本質論への一考察　藪內芳彥

(七月)

地理教育　西洋で出版された日本の古地圖について　藤田元春
同　尾張一宮三八市を觀る　內田寬一
彥根高商學報　持つ者と持たざる者との對立　田中秀作
史前學雜誌　廣島市外溫品村岩谷觀音寺貝塚——海拔三五〇米の所に堆積した貝塚——　神尾明正

(八月)

地理教育　布施市の現狀　島之夫・石井信一
同　山城盆地の地誌(一)　吉田敬市
同　最近我國貿易の趨勢　內田寬一
同　世界各國の經濟政策と本邦貿易の動向　下岡謙佐
同　日本民族の對外發展と風土馴化に就て　田中秀作
同　我國の優秀特殊性と貿易　寺田貞次
同　日滿貿易の現狀　中野竹四郎
同　對支貿易の消長とその特殊性　伏見義夫
同　大阪港貿易の變遷について　別枝篤彥

同　　本邦の綿貿易　村松繁樹

同　　印度の經濟地理と日印貿易　米倉二郎

地理學　滿濃池開拔（地理附錄）　寺田貞次

（九月）

地理教育　北支那黃土地域に於る戰爭の地形的考察　小川琢治

同　　山城盆地の地誌（二）　吉田敬市

（十月）

地理學　栽培植物の原產地（地理談話室）　織田武雄

地理教育　現代支那の交通路の狀況に就て（一）　別技篤彦

同　　文明の發展と地理（四）　内田寛一

同　　一地理學者の生涯（二七）　小川琢治

史林　魏志倭人傳に見えた伊蘇志の一族　藤田元春

（十一月）

地理教育　現代支那の交通路の狀況に就いて（二）　別技篤彦

同　　上海市景觀（一）　増田忠雄

同　　文明の發展と地理（五）　内田寛一

（十二月）

地理教育　文明の發展と地理（六）　内田寛一

同　　上海都市景觀（二）　増田忠雄

彥根高商論叢　近江商人關係の商人に就いて　田中秀作

書物新潮　十二、一　奈良盆地の民屋 ——大和棟は大陸文化の遺物也——　島之夫

五、談話會々計報告

○過日談話會維持費御寄附相成度旨申上げたる所十二月十三日現在左の如く四十二氏より寄附を忝した。（敬稱を略す）
伏見（二圓）、山口、朝永、和田、織田、小野、長谷部、室賀、小牧、辻田、近藤、濵本、松井、松下、内田（秀）、田中（博）、内田（勘）、島、下田、中野、飾尾、田中（秀）、舞子、大塚、廣瀬、入江、村井、米倉、寺田、宮川、杉村、勝田、谷岡、三瀦、塚本、海老原、大橋、土田、小葉田、野間、村本、村松（以上一圓）

○會報Ⅳ作製並發送に要したる費用は會報Ⅳ百十部十四圓四十五錢、名簿百十部六圓六〇錢　發送費三圓
右報告致します。